

コリント人への手紙第二9章6-7節 「惜しみなく与える恵み」

1A 豊かに蒔く者 6

1B 与えるところにある豊かさ

1C 豊かな神との交わり

2C 与えられる原則

2B わずかにしか刈り入れない者

1C 関わりの薄い者

2C 自分を持っている者

2A 喜んで与える人 7

1B 神に愛されない献げ物

1C 嫌々ながらの献げ物

2C 強いられる献げ物

2B 心に決める献げ物

1C 前もつての用意

2C 主の前での用意

3B 神の愛

本文

コリント第二 9 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはコリント第二 8 章まで来ました。今日は、午後礼拝で続き、9 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、その中で 6 節と 7 節に注目します。「⁶ 私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。⁷一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」

前回、8 章に引き続き、パウロは、コリントにある教会の人々に、エルサレムの貧しい兄弟たちのための献金を前もって集めておく必要について勧めています。パウロなどの宣教の働きによって、建て上げられた、異邦人が主体の教会が、アジアのみならず、ギリシア、そしてローマにまで広がりました。これらの教会は、もちろん、ユダヤ人であるイエスを信じる者たち、すなわちエルサレムから始まり、ユダヤにいたる兄弟たちが伝えていた福音によるものです。その福音は、ユダヤ人のみならず、ギリシア人であっても、だれでも、信じる者に救いをもたらす神の力がありませんでした。それで、福音には、キリストにあつて二つのものを一つにする平和がありました。

そこでパウロは、飢饉が起こって貧しくなっているユダヤ人の兄弟たちのために、異邦人主体の教会が救援や支援の手を差し伸べることによって、その一つになっている姿を目に見えるかたち

にしていく奉仕に熱意を持っていました。アンティオキアの教会が生まれて、その時に大飢饉が地域一帯に広まり、貧しくなったユダヤの兄弟たちのために救援を行っています。そして今、ガラテヤ地方でも、またコリントのあるアカイア地方でも、献金を集める働きを行っていました。コリント人への手紙第一には、献金をこれから募りに行くことについてパウロが書いています。

そして、彼らはこのことに喜んで応答していました。ところが、他の罪の問題で、教会が荒れにありました。パウロが、厳しい対処をしました。また厳しい手紙を送りました。その手紙に対してコリントの人たちがどう対応したか、テトスが聞きました。テトスと、マケドニアのところでパウロは会うことができました。それで、彼らが罪に対して憤り、悲しみ、悔い改め、正しく対処しているという報告を受けました。主に対する熱意が彼らに戻ってきたのです。パウロは、とても慰められています。けれども、この騒動によって、いつの間にか献金プロジェクトについては、コリントの中では立ち消えになっていました。そこでパウロは、彼らに再び献金を用意するように勧めたのです。ですから、何もその気のない彼らに、プレッシャーをかけるように勧めているのではなく、元々、その熱意があった彼らに、その火を再び燃え立たせるように励ましているのです。

1A 豊かに蒔く者 6

そこでパウロが教え始めたのは、「惜しみなく分け与える」という原則です。「**わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。**」ということ、そして、「**神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。**」というところ です。

1B 与えるところにある豊かさ

1C 豊かな神との交わり

前回 8 章でも学びましたが、惜しみなさが神との関係でとても大切になります。見返りを求めない、ひも付きではない関係が非常に大切になります。主イエス・キリストの恵みを私たちは知りました。この方は豊かであったのに貧しくなられて、その貧しさによって私たちは富む者となった、という御言葉を見ていきましたね。恵みにおいては、「惜しむ」ということがないのです。神は惜しむことなく、私たちのために、ご自分の独り子を遣わしてくださいました。惜しむことなく、この方が罪の供え物になるようにされたのです。神の恵みがここにあります。

そして、その恵みを知った者は、必ず変えられます。これまでは、何か恩恵を受けても、実はそれはひも付きで、借りがあるとしてお返ししなければならないという考えでした。けれども、恵みというのは、返済が一切できないことを知っていて、それでも与えていることなので、その束縛、呪縛から解放されるのです。神が恵みをもって触れてくださった魂は、次に恵みをもって神に応答します。つまり、自分が神に献げないと、何か罰(ばち)が当たるというような、恐れによって、自分に罰が当たらないようにするという自己中心的な思いではなく、ただ、愛しているから献げるといように変えられるのです。自分が罪を犯してしまうことについては、何か罰を受けると恐れるのではなく、

愛してやまない神の心を傷つけてしまったと悔いて、悲しむのです。このようにして、神の恵みは人の心を一新します。人が真実に、自己中心的な思いから解放されて、ただ神を喜ばせるために仕えるという、神中心の思いに変えられるのです。

そうした恵みの神を信じて生きているのですから、他者に対しても恵みをもって接していきたいと願います。紐付きではなく、ただ献げたいと願うようになります。キリスト者の奉仕について、しばしば驚かれますね。どうして、そんなことをしているのですかと驚かれることがあります。例えば、私がかつていた海外の宣教地では、数多くの方が日本に出稼ぎに来ています。自分たちのところよりも、日本は豊かであることを良く知っています。ですから、日本人だと聞くと驚くのです。私たちが日本に行くのであって、日本人がなぜこっちにいるのか？ということです。私たちは、ただ主がそのように言われたから、という理由しかありませんでした。

これが、「豊かに蒔く」ということです。豊かに蒔くとは、必ずしも物理的に多くを献げることではありません。前回、マケドニアの人々が、極度に貧しいのに自分たちの能力以上に献げているということを、パウロが8章で話していました。彼らの特徴は、「まず自分自身を献げている」ということでした。恵み豊かな神を知っていて、この方の働きに関わることのできる恵みを知っていたのです。そこに、あふれるばかりの喜びがあって、それで、自分たちのほうからパウロに、献げること強く要望したのです。そこには、自分というものが存在しません。自分を忘れていました。

一昨日、祈りの課題として、ウクライナ人の難民がモルトバという国で援助を受けている話を読みました。ポーランドなどは、ニュースでも多く報道されていますが、モルトバという国、わずか47万人しかいない小国です。欧州の中で最も貧しい国なのだそうです。けれども、そこにある教会が、犠牲を惜しまずに難民を助けているのだそうです。また、ウクライナ難民で、さらに知られていないのが、ロシアに移動した人々もいるのです。これは侵略してきている国に逃げることであり、これほど屈辱的なことはありません。しかし、そこで助けている人々の中に、ロシアの教会があるのです。彼らは、反戦の声を挙げるなら、たちまち牢屋に入れられるという危険の中にいますが、それでも、ウクライナのために祈り、そうした難民に助けの手を差し伸べています。これも、豊かに蒔くことです。恵みに富む神に触れられたから、見返りを求めず、惜しみなく献げています。

2C 与えられる原則

そして、「豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。」とありますね。私たちは、物理的には、豊かに惜しみなく与えたら、手元には何も残らない、枯渇してしまうと思います。与えたら、なくなります。しかし、恵みの神にある世界では、その逆のことが起こります。与えれば、与えられるのです。イエス様が言われました。「ルカ 6:38 与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです。」主は、信仰をもって私たちに与えるこ

とを勧め、励ましておられます。与えれば、人間的に考えれば、なくなってしまうのですが、そうではなく、主が惜しみなく、その必要を満たして下さり、与える者にあふれるまでにしてくださいという恵みに入れてくださるのです。

エリヤのことを思い出します。イスラエルの地に雨が降らず、飢饉のときに、シドンにいるやもめのところに行くように命じられました。そのやもめは、息子がいましたが、最後のパンを調理して、それで死のうと思っていました。ところが、主はエリヤを通して、その最後の粉と油を、エリヤのためにパン菓子を作ってあげなさいと命じられるのです。これは、人間的に考えたら、何とも酷い話です。彼女はそれに応答しました。すると、彼女の家の、かめの粉は尽きず、壺の油はなくなりませんでした。主の言われることに応答すると、恵みの神はそのすべての必要を満たされます。

よくよく考えれば、私たちのキリスト者の人生そのものが、その恵みの証しなのではないでしょうか？ イエスを自分の人生の主とするということは、まさに自分の魂を明け渡す行為です。取引ができるような余裕がありません。ちょっとだけその神に仕えて、後は自分の生活をエンジョイする、というものではありません。主とするのですから、すべてを明け渡すのです。普通に考えたら、人生を棒に振るようなことではありますが、しかし、どれほど恵み豊かにされることでしょうか？ 与えたら、あふれるばかりに与えられます。

けれども、気を付けないといけないのは、豊かにされるために、豊かに蒔くということではありません。偽りの教えがあり、自分が金持ちになるために、今、これだけの金額を献げなさいという勧めを、こういった箇所から教える者たちがいます。そうではないのです、まず、私たちが豊かにされるのは、必要を満たされることにおいて豊かにされますけれども、自分の欲望を神は満たされるかたではありません。そして、豊かに刈り入れるのは目的ではなく、結果です。永遠のいのちが欲しいから、天国に行きたいから、自分が良い思いをしたいから、イエス様を信じるとのは誤った動機ですね。そうではなく、自分が地獄にいて当然の身なのに、身代わりにキリストが神の怒りを受け取ってください、罪の赦しを備えてくださった、その愛と恵みに感動し、それを受け入れて、結果として永遠のいのちを得るのです。そこに、恵みがあります。

2B わずかにしか刈り入れない者

けれども、「**わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ**」と言っていますね。これはもちろん、農作業において当たり前の原則ですが、恵みにおいても同じことが言えるということです。主の恵みに対して十分に応答しなければ、それだけのものしか味わえないということです。これは、かなりもったいないことです。

1C 関わりの薄い者

豊かな恵みがあるのだから、豊かに分け与えれば、豊かにされるのに、自分のほうで、その関

わりを抑えて、控えめにして、自分の生活をしっかり持っているという状況です。ある方のブログ記事で、「エコクリスチャン」という言葉を見ました。車や家電が「低燃費、エコ」になってきているのに伴い、信仰に燃えない「低燃費、エコクリスチャン」と表現していました。「頑張らない」「できる範囲で」「できるだけ教会に関わる時間は少なくする」「奉仕は減らす」というように、いかに燃えないで、極力、無駄なエネルギーは費やさずに、信仰を細く長く続けていくか？という思いが働いている、ということです。!

2C 自分を持っている者

もちろん、無理をしないことは、自分の肉体のことを考えて必要なことがあります。けれども、霊においてまで、そうした考えで行ってしまうのは、いかがなものかと思います。それは、あたかもその燃料が、自分自身から出ているという前提で動いています。けれども、これまで見てきたように、神の恵みから始まっています。自分自身から出たのではなく、神から出ているのです。そして、神の犠牲に応答しているのですから、私たちも犠牲を払うことによって、はじめて恵みが豊かにされます。主に自分自身を献げる時に、自分ではなく、主が自分を満たしてくださるので、どんどん豊かにされるのです。

タラントの喩えのことを思い出してください。主人がしもべたちに、それぞれ五タラント、二タラント、そして一タラントを任せました。それによって商売をするためです。五タラントと二タラントの人は、それぞれ五タラント、二タラントをもうけました。それで主人は、小さなことに忠実だから、大きなことをまかせます。けれども、一タラントを受け取った者は、神に与えられた賜物に関わりたくなかったのです。それで土に埋めました。しかし、そのことによって、自分の持っているものまでも、取り上げられることとなります。自分を救おうとする者はそれを失い、福音のために失う人は、それを救うとあるとおりです。

2A 喜んで与える人 7

そして、「**7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。**」と、パウロは言いました。喜んで与える、という言葉は、「うれしくて、仕方がない」みたいな意味合いがあります。これが、恵みの現れです。うれしくて仕方がない献げ物には、条件がありません。ひも付きではありません。

自分の献げる物に、暗黙の条件を付ける人たちがいます。例えば、自分は教会にこれだけ献金しているのだから、あなたがたは私の要望を聞かないといけないと圧力をかけます。あるいは、物品で教会にあなたがたは椅子が必要ですよね？として、自分の会社で余った椅子を教会に持ってきます。それで、教会が使わないとすると、なぜ使わないのだ！と怒り出します。自分がその献げた物によって、教会を支配しようとし、操作しようとしています。これだけ献げたのだから、あなたには借りがあるのだ、という態度です。これは恵みではありません。神は、全く借りを作らずに

私たちに恵まれました。ですから、私たちも喜んで献げるのです。そのことによって、恵みの世界で生きることができるからです。

主はモーセに、地上に幕屋を造るように命じられました。それぞれの材料を持ってくるように、主は命じられました。そして、民が次々と持ってきました。そして、その材料で幕屋の用具を造っていた者たちが、モーセのところへやってきました。「出 36:5-6」民は何度も持って来ます。【主】がせよと命じられた仕事のためには、あり余るほどのことです。」6 それでモーセは命じて、宿営中に告げ知らせた。「男も女も、聖所の奉納物のためにこれ以上の仕事を行わないように。」こうして民は持って来るのをやめた。」あまりにも持ってくるので、やめさせたほどです。これが、喜んで献げる姿です。惜しみなく、気前よく献げるのです。

1B 神に愛されない献げ物

1C 嫌々ながらの献げ物

パウロはまず、神の愛されない献げ物について語っています。一つは、「いやいやながら」献げる物です。律法を見れば、献げ物については、罪や罪過のいけにえについては、しなければいけないもの、義務であることが書かれています。罪を犯せば、神との関わりが断絶し、イスラエルの民からも断たれてしまうからです。ですから、ここには選択肢はありません、罪のいけにえは献げなければいけません。けれども、その他の、全焼のいけにえ、穀物の献げ物、そして交わりのにえについては、「自ら進んで」という言葉が繰り返されています。律法において、イスラエルの民が何かを献げようとする時に、自ら進んで献げるものになっています。何一つ、いやいやながら、というものがありません。主は、マラキ書でいやいやながら奉仕をしている祭司たちを咎められました。「見よ、なんと煩わしいことか」と言って、それに蔑みのことばを吐いている。(1:13) 私たちは、この逆を考えてしまうのではないのでしょうか？ 献金しないと罰せられるのではないか？ だから、仕方がない、献げる、と。それは主が忌み嫌われます。

これは献金に限らず、あらゆる献げることについて言えます。私は、教会について、この教会でいいのかどうか？と悩んでいる人々の相談をしばしば受けます。その時の決まった助言は、「イエス様を自由に礼拝していますか？」ということです。イエス様を仰ぎ見ることこそが、礼拝することこそが、主が喜ばれることです。他の人々のことを気にして、それでしたくない奉仕をして、したくない献金をして、それが天国において宝を積んでいることになっているのかどうか、考えるべきです。天国にいて、自分がどれだけ我慢して？ 献げた時間について、全く報いは残されていないのです？「わたしは、そんなこと命じたことはないのだが。」と言われてしまいます。

2C 強いられる献げ物

そして、次に神が愛されないのは、「強いられてでもなく」ということです。パウロは、コリントの人たちが前もって献金を用意できているように、テモテたちを先に遣わして、それでパウロが行った

時には、献金を受け取るだけにしようとしています。なぜなら、パウロが行ってから、その場で献げるようにさせたら、それはプレッシャーから献げることになってしまうからです。あくまでも、自ら進んで、喜んで献げてほしかったのです。

同調圧力という言葉が一般化してから、久しくなっています。これがまさに、強いられることです。自ら心で決めるのではなく、周囲がやっているからということで同じことをします。けれども、これは神の喜ばれないことなのです。献げるということについては、注意深く、強いられたものならないように、知恵をつかって配慮すべきです。例えば、カルバリーチャペルの多くは、献金袋というのを回しません。このような習慣がある教会は、それはそれで何かの知恵で行っているのだと思いますが、けれども、これだけこの人は献げたということが、牧者や他の会計の人々に知られることになります。そうすれば、喜んで献げるのではなく、何か自分に期待されているのだという圧力を感じて、それで献げるのであれば、本末転倒なのです。

2B 心に決める献げ物

いやいやながらではなく、また強いられてでもない献げ物であるべきで、そうではなく、「**心で決めたとおりにしなさい**」ということです。

1C 前もつての用意

ですから、先ほど説明しましたように、前もつての用意がよいです。その場の感情や雰囲気、献げるのではなく、祈り、前もつて準備することによって、確かにそれが自分の心で決めたものであるからです。よく考えれば、私たちの信仰生活が、そうではないでしょうか？その場の雰囲気、イエス様に従う決断をしたでしょうか？そうではないですね、もしそうしていたら、そんな時間を経ずに、元の不信仰の状態に戻ります。自分の心で決めて、それでイエス様に従っていると思います。献金も同じように、前もつて、これだけ献げるのだとするのです。

2C 主の前での用意

そして、これが人からの圧力ではなく、あくまでも主に対する感謝の表れとして、主に対して献げるものです。人に言われたからやるとなれば、いやいやになります。人に言われたから、となれば、強いられることになります。けれども、そうではなく主に命じられているからという理由だけで、献げます。こうやって、心で決めたとおりにできるのです。

3B 神の愛

したがって、私たちのすべての献身、献金を含めた献げることは、神の愛への応答になります。神は、私たちを愛しておられます。そして、私たちが、その愛の応答し、自分自身を献げます。この関係を神は愛されます。それ以外で献げられても、意味がありません。神は、何か困ったことがあるわけではないのです。仕えられないとやっていけない方ではないのです。もし、やっていけない

のであれば、それは偶像です。しかし、神は、私たちと愛の関係を保っていて欲しいと願われています。それで、心で決めたとおりの献げ物、喜んで与えることを望まれているのです。これが、神の私たちに対する、献げ物をするを命じておられる理由です。

ⁱ <https://ameblo.jp/pastorswife/entry-12432776737.html>